

巻頭言

歴史分科会長 瀬谷高校 長島一浩

いよいよ新たに導入される新科目の歴史総合では、その目的は「歴史を通して市民を育てる」とされ、「個々の事実を正確に教えること」より、「歴史を通して社会のあり方について考え、積極的に社会に参加しよう」と思うような授業が必要、とあります。さらに、「歴史の教員もそろそろ思考回路を切り替え、何のために歴史を学ぶのか」を考える、と言われていています（以上、原田智仁「歴史総合ってどんな科目？」 清水書院「Research」2020.2nd）。

歴史総合では周知のように主題学習の実施がありますが、授業における実践上の課題として、主題学習の実施自体の如何が指摘されています。これは「通史信仰の克服」と言われ、歴史総合では通史を絶対視した学習によらない主題設定・資料選択・問いの設定による授業を行います、それが新科目自体の成否の鍵を握るとされているのです（原田前掲、同「高等学校新設科目「歴史総合」の課題と可能性」 日本教材文化研究財団紀要48、2018）。

通史学習が「信仰」か否かは見解が分かれると思われませんが、ここで注意すべきは、そもそも、主題学習以前に、教材研究に際して教員自身が最低限、歴史内容の通史的理解がふまえられなくてはならない点でしょう。専門研究の進歩は著しく、相当に歴史像は変化を余儀なくされています。各時代の通史的理解の内容は高度となっていますが問題は通史か主題かでなく、いわば必須の前提として、教員自身がまず個別の歴史的な事象、各時代の内容自体を適切に理解・把握出来ているのかという点にあると思うのです。

現代世界に直結している近現代を主題学習で、というのは一見説得的です。しかし、現実主題設定・資料選択・問いの設定などを適切に行うことは容易でなく、どのように考え対応していくのか、それに対する理論・言説が少ない。すなわち、「どのように教えるか」だけでなく、「何を教えるか」こそがより一層検討されねばならないと思われるのですが、そこに対するリアリティが疎かになってはいないか、と思われるのです。

さらに、教員側の認識すべき点について、「言行一致」ということがあると思います。「歴史の流れを理解していて何もしない人より、多少歴史の知識に欠落があっても、社会の課題に正面から取り組む方が頼もしい」（原田前掲、2020）とありますが、それならば教える側の教員はどうか？、現実にそうなっている（なろうとしている）か？ということ。歴史総合の理念・趣旨に拠るならば、教員は授業実践と共に生徒に対して率先してその範を示し、積極的な社会参加を行わねばならない。授業でただ生徒に促すのみでは駄目で、教員自身も日常的に課題解決のための行動が伴わねば、その理論・実践は説得的にならないと思います。

極端な例かも知れませんが、歴史家・マルク＝ブロックは大戦中のレジスタンスで斃れました。遺作の名著『歴史ための弁明』には「なぜ歴史を学ぶのか」というアポリアに対する態度が鮮明に示されていますが、ブロックの説得力は言説だけでなく、加えてこのような一徹な行動にこそその根源があるように思うのです。

歴史総合は教える側の言行一致を含む、より高いレベルの意識と行動も求めているように思えます。